



デジタル教科書と「学びの未来」～諸外国の動向とこれからの学び～

文部科学省の検討会議において、「学力等への効果・影響、諸外国の動向について」という資料が示されました。デジタル教科書の実証研究データや諸外国の知見を整理したもので、これからの教育を考えるうえで重要な示唆が含まれています。



○ 諸外国の動向から見えてきたこと

ICT 教育を先行して進めてきた北欧をはじめとする諸外国では、急速なデジタル化を経て、現在「紙の教科書や手書きの学び」を再び重視する揺り戻しの動きが見られます。これはデジタルを否定するものではなく、「画面上の文章と紙の文章では思考の深さに違いが出る」とや「手書きが記憶や理解に果たす役割が大きいこと」が分かってきたためです。「デジタル一辺倒ではなく、目的や発達段階に応じたバランスが必要である」という知見が世界的に共有されつつあります。

○ 国（文部科学省）の最新方針

こうした流れを受け、文部科学省においても「すべての教科書をデジタルに置き換える」のではなく、学校現場の状況や教科の特性に合わせて「紙のみ」「紙とデジタルの併用」「デジタル中心」などの形態を選択できる柔軟な仕組みを整える方向で整備が進められています。

○ 各学校における「紙とデジタル」の活用

各学校におきましても、現在、タブレット端末を活用し、双方の良さを高め合う「ハイブリッドな学び」を大切にしているところです。例えば、デジタルの強みを活かす場面では、動画や音声による視覚・聴覚的な理解、シミュレーション、一人ひとりの習熟度に合わせた個別学習、意見の多様な共有などです。また、紙・手書きの強みを活かす場面では、長文を深く読み込む学習、じっくり筋道を立てて考えを深める記述、試行錯誤しながら作図や計算を行う学習などです。

デジタル時代だからこそ、今後も「紙で深く読み、手で書いて考え、デジタルで広げる・共有する」という学びの基盤をしっかりと育んでまいりたいと考えております。ご家庭におかれましても、タブレットでの学習状況を見守っていただくとともに、時には紙の本をじっくり読んだり、手書きでノートをとったりする時間の尊さについて、お子様と話題にいただければ幸いです。

「眠り」から見つめる、子どもたちの健やかな成長

近年、スマホやタブレットの普及などデジタル環境の変化に伴い、子どもたちの「睡眠不足」が全国的に大きな課題となっています。

太宰府市では、学校・家庭・地域が一体となって子どもたちの睡眠改善に取り組む、太宰府市教育委員会の先進的なプロジェクト「太宰府市眠育研修会」が行われました。

研修会の中で発表された市内の小中学生約 3,600 名を対象とした調査データによると、学年が上がるにつれて就寝時刻が遅くなり、推奨される睡眠時間に比べて「約 1 時間」不足している実態が明らかになりました。また、約 7 人に 1 人の子どもが日中に「強い眠気」を感じているという結果も出ています。

専門家の先生方からは、「イライラする」「集中力が続かない」「学習意欲が湧かない」といった行動の背景には、単なる怠慢ややる気の欠如ではなく、「睡眠の質の低下」が隠れていることが多いことが指摘されました。さらに、幼児期から思春期にかけての成長段階ごとに気をつけるべき睡眠のトラブル（体内時計のズレや睡眠障害など）についても医学的な視点でのお話がありました。

睡眠不足は休日の「寝だめ」では解消できず、日頃のリズムが大切です。単に「早く寝なさい」「スマホをやめなさい」と禁止するのではなく、「どうすればよい睡眠がとれるか」をご家庭でもお子様と一緒に考えていただければと思います。学校でも、一人ひとりの変化やサインに目を配りながら指導にあたってまいります。今後も学校・家庭・地域で協力して子どもたちの「睡眠と生活リズムの改善」に取り組んでいきたいと思っています。

